

# 知的障害児童が関わり合う授業づくりに関する研究

～対象児童の発達段階を踏まえて～

○宮田 大嗣 片岡 美華

(鹿児島県立牧之原養護学校) (鹿児島大学教育学系)

KEY WORDS: 協同的な活動, 発達の最近接領域, メタ認知の促進

## (目的)

知的障害のある児童生徒を対象とした教育(以下, 知的障害教育と記す)では, 将来の自立と社会参加を目指した一人一人の教育的ニーズに応じた教育が行われている(文部科学省, 2007)。その中でもコミュニケーションに関する指導に関しては, 自立活動や国語科, 生活などの教科・領域で扱われている(文部科学省, 2009)

一方で, 知的障害教育では, コミュニケーションの指導法や一般化に関して不安を抱えている現状が報告されている(今井・生川, 2013)。今後の学習指導要領改訂に伴い, アクティブ・ラーニングが導入されることを踏まえる(丸山, 教育課程研究会, 2016)と, 知的障害教育において, コミュニケーションを育む環境や方法を探ることが急務であると考えられる。

そこで, 本研究では, 学習者同士が関わり合い, コミュニケーションの力を育むための授業の在り方を, 実践を通して検証することを目的とする。

## (方法)

本研究では, 渡邊(2014)を基に, 学習目標を共有する仲間において, その達成過程で起こるものや言語, 動作を介した相互作用を, 『協同的な活動』と定義した。

本研究はX年3月～12月にかけて, Q養護学校小学部の6年生の男子児童3人を対象に行った。X年3月に対象児に新版K式発達検査2001を実施し, 発達年齢や現在の状態像を把握した。授業実践はX年5月～12月に, 国語の授業で週1回, 計16回実施した。指導する内容はQ養護学校の教育課程に基づき, 協同的に活動できるような活動を加えて, 4つの単元にわたって実施した。

授業の様子をビデオカメラ1台で撮影し, エピソードを中心としたトランスクリプトを作成した。分析は, 作成したトランスクリプトから協同的な活動の定義に即したものをピックアップし, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)に基づいて分析をし, 結果図を各単元において作成した。また, エピソードそのものの解釈も行い, 新版K式発達検査2001の結果を踏まえ, 総合的な解釈を試みた。

## (結果及び考察)

X年3月に行った, 対象児童3人の新版K式発達検査2001の結果及び発達段階を, Table.1に示す。また, 各期のエピソードを基にした結果図はFig.1～Fig.3に示す。

Table.1 新版K式発達検査2001の結果

児童	新版K式発達検査2001の結果に基づく発達年齢			田中(1987)の発達理論に基づく発達段階
	認知-適応(C-A)	言語-社会(L-S)	三領域合計	
A	4:0	3:10	3:10	二次元形成期
C	5:7	5:4	5:5	二次元可逆操作期
F	7:1	4:6	5:10	二次元可逆操作期～三次元形成期

これらの結果図を基にして, 児童が協同に関わり合うための要因を, 児童の発達段階から検討した。

A児に関しては, 田中(1987)に基づけば発達段階は二次元形成期にあたり, C児やF児の発言を模倣することが非常に多く見られた。しかし, 実践が進むにつれて, C児やF児の発言に受けて, 自分の考えをつぶやいたり, 自分

から働きかけようとしたりする行動が増加した。C児に関しては, 発達検査で, 二次元可逆操作期にあることが明らかとなった。実践当初, 自分が答えたいという思いが強くと表れ, A児やF児が答えることを阻止したり, 答えを言われて不機嫌になったりする様子が見られた。しかし, 実践が進むにつれ, C児は, A児やF児が困っているときにヒントを出したり, 代わりに答えを出したりするなど, 援助行動を出すようになった。F児に関しては, 授業中でのA児やC児への協同的な関わりが少なく, 全体を通して低調であった。

このことから, 全体的な傾向として, 児童間の関わり・協同的な活動を通して, お互いの発達の最近接領域を引き上げ合ったことが推測される。A児が実践当初に頻繁に行っていた発言の模倣は, 発達の最近接領域が延長される過程で起こる行動ととらえることができる(Vygotsky, 柴田訳, 2001)。

次に, お互いの最近接領域を引き上げ合った要因について検討を行った。Fig.1及びFig.2に『チェック』という項目が共通して現れている。本研究で得られたエピソードにおいても, 出した答えを児童間で確認するときに, チェックをする目的をお互いの児童が理解できていないことで, 間違えているのに気付かないことがあった。

渡邊(2014)は, 知的障害児が協同的に活動するために, プランニングやモニタリングなど, メタ認知に働き掛けることが重要であることを指摘している。前述したチェックに関しては, 渡邊(2014)の指摘に基づけば, なぜチェックをするのか, そしてどのようにチェックをするのかの2点が, 対象児童にとって明確になっていることが必要である。

対象児童の発達年齢と類似した, 幼児期におけるメタ認知の促進においても, 学習者の意識を向けるような言葉掛けや保育者の姿勢の重要性が指摘されており(藤谷, 2012), 発達段階を考慮することの重要性が示されたと言える。

## (主な文献)

- 田中昌人(1987). 第I部 発達における階層間の移行について. *人間発達の理論*. 青木書店. 3-156.
- 渡邊雅俊(2014). 知的障害のある児童生徒における協同学習の可能性 - 「仲間との協同活動」支援の視座-. *教育実践学 実践学研究: 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要*. 19. 37-45.

(MIYATA Daishi, KATAOKA Mika)

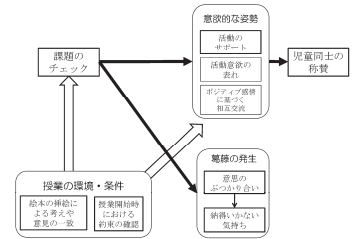


Fig.1 I期の結果図

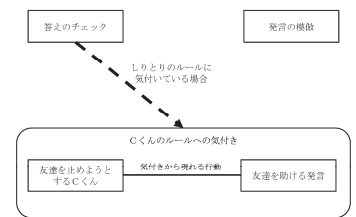


Fig.2 事後テストの結果図